

この本は、梶井基次郎の私小説で、21の小説が書かれています。「のんきな患者」は、基次郎の肺結核を患った経験を、包み隠さず告白しており、当時、不治の病と言われたこの病気に対する、絶望と一縷の光明の交錯が伝わってきます。やはり、病床では刹那的になり、何気ない母の言葉に癩癩を起こし、愛猫にも愛想が尽きる彼でしたが、たまに体調の良いときには市場を散策しました。顔色の悪い彼を肺病と見たある宗教の勧誘者に執拗に迫られる場面では、うるさいと思いつつも、生活の為、必死に生きている姿に、自身の世間知らずを思い知らされます。この短編からは、悲観的な生の描写に被われており、正直、気の重くなる思いでした。一方、「雪後」は、妻帯し、希望に溢れた日々を綴っています。東京郊外の借家住まいで、妻との温かい会話がよく交わされる場面が多く、彼最も充実した時代であったろうと思われれます。ある日、身ごもった妻が転倒し、幸い、胎児にも彼女にも大事はなかったですが、この事を隠していたのをあとで知った基次郎（行一）の落胆は、文字から伝わってきました。なんで隠すことがあるう、と日々の研究活動にも影響するのですが、この一件後の詳細には触れていないのが腑に落ちませんでした。基次郎の作品は、肺病を通じて、死と隣り合わせの感情をあからさまに伝えているのが特徴といえます。

沖積社

掲載の記事・写真・イラスト等の全てのコンテンツ無断複写、転載を禁じます。

(株)ファッションビジネス・御堂筋新聞